

奇妙な？ 「士気昇揚」

——『黒い雨』と『重松日記』

齋藤 一

今回、私は、『黒い雨』が「古典」として、つまり皆がよく知る作品として了解されているとして、それではなぜそうなったのかについて考えるための情報を提供できればと思っています。本日の話題は、『黒い雨』を授業で扱った際に思いついたことです。私はこの小説を授業で学生に読ませたのですが、学生は全員『黒い雨』の存在は知ってはいても、誰も読んでいませんでした。そこで課題図書として無理矢理読ませてみると、学生はいろいろと意見を言い始めておもしろかったのですが、私が『重松日記』といるのがあるという話をしましたところ、一人の学生が『重松日記』を貸して欲しいと言いましたので貸しましたら、「先生これものすごく似ていますね」と言いました。そのようなきっかけがあったので、私もあらためて『重松日記』と『黒い雨』を比較して読んでみました。そうすると、盗作云々という議論も無視できないのかもしれませんが、それよりも『重松日記』の重松静馬が

書いた言葉の中で、非常に目立つ部分が『黒い雨』のほうに生かされていないということが大変気になりました。この点については先行研究があるのかもしれませんが、今日はその話をしたいと思います。もう一点、『黒い雨』の「古典」化ということについて、ジョン・ハーシー『ヒロシマ』(John Hersey, *Hiroshima*)に比較対象として触れることができばと思います。

私は、最近、太平洋戦争のあとに、日本の英米文学者がアメリカとどのように付き合っていたのか、どういう関心を持ってアメリカ文学やイギリス文学、つまりかつての敵の文学を勉強していたのか、そういうことを調べておりますが、この研究会もきかけとなり、井伏はどうなのかということを考えてみました。具体的には、『黒い雨』の中にはアメリカのことはどのように書かれているのだろうかと考えました。「アメリカ軍が原子爆弾を広島市に投下して、十万人以上の死傷者が出た」という厳然たる

事実が存在するわけですが、これについて『黒い雨』の中で何度も書かれているということはないのだろうか、『重松日記』の中でこのような事実というのが書かれているのだろうか、ということとを調べました。

結果から申しますと、私が読んだ限りでは、『重松日記』も『黒い雨』の中にも、誰が原爆を落として、誰が死傷者を出したのかというのについては、詳細には書かれていません。『黒い雨』の閑間重松の直接的な言葉として、アメリカ軍が云々と言う記述はありません。その代わりにあるのは「大本営発表からの引用で、『黒い雨』の新潮文庫版の二五三ページにあります。「大本営発表。(一)昨八月六日、広島市は敵B 29少数機の攻撃により、相当の被害を生じたり。(二)敵は、右攻撃に新型爆弾を使用せるもの如きも、詳細目下調査中なり」。なおこの「詳細目下調査中なり」という言葉はハーシーが『ヒロシマ』第三章のタイトル、Details are being investigatedとして使われています。次に、文庫版の三三三ページです。これは天皇の「終戦の詔勅」からの引用で、「敵ハ新二残虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻^{シテ}二無辜^{ムコ}ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所真二測ルヘカラサル……」とあります。以上二箇所は日本によるアメリカへの批判として指摘できますが、いずれも閑間重松の言葉としては書かれておりません。参考として、『黒い雨』の文庫版二〇五ページに閑間重松の次のような言葉がありました。「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和のほうがいい。」これも、アメリカのことをどうこうするという言葉ではありません。先程、中野さんからいろいろと先行研究の紹介がありました。こうし

たことを念頭におけば、閑間重松は、少なくとも表面上は、アメリカ力に対する強い感情を吐露するような人物ではなく、「平常心」や「日常性」を重んじる「平和な人」として表現されていることがわかります。

では、このような言葉が『重松日記』にあるのかということなのですが、『重松日記』の一二五ページに次のような言葉があります。「それに、誰も敵米国のことを云わなかった。考えてみると、放心の中に被災事実だけが焼き付いたらしい。僕も敵米国に対する恨みなど、とんと忘れていた。それどころではない、勝つことも戦っていることも忘れがちな日々が続いた。此の心境は僕だけでもない。広島市民のほとんどが同じだと思う。」ここで重松静馬は「敵米国」という言葉を使っているのですが、しかし、それをもう「忘れていた」と書いております。ですから、『重松日記』のほうにはかろうじて「敵米国」と言う言葉が使われていますが、それすらも『黒い雨』の方では削除されているということです。

『重松日記』のわずかな「敵米国」という言葉すらも削除した井伏の意図は、現時点では明言できません。ただし、「アメリカ軍が原子爆弾を広島に投下した」という書き方をしていないという点において、『黒い雨』と『ヒロシマ』という文章はよく似ていることは指摘したいと思います。ここで私は、井伏がハーシー『ヒロシマ』を、一九四九年に法政大学出版社から出版された邦訳で読んだのではないかなどと言っているわけではありません。「アメリカ軍が原爆を落とした」というのを直接的に描いていないという点において、ハーシーの場合は、アメリカ軍が原爆を投下し

たという書き方はしていないという点で、この『黒い雨』と『ヒロシマ』の二つは似ていると考えました。だからこそ、「古典」と言いますか、高校等々の授業で使用しやすかったということがあったのではないかと思います。古典になるための一つの条件として、「アメリカの爆撃行為をはっきり書かない」というのが存在するのではないかとということです。問題提起としてお話をさせていただきました。

本日の二つ目の話題です。私にとつては非常に興味深いエピソードが、『重松日記』と比較して、『黒い雨』のほうには二つ抜けています。一つは、『重松日記』の重松静馬が工場に到着する場面です。この到着の場面は、『黒い雨』にも登場します。しかし大きな違いがあります。それは、『重松日記』の重松静馬は、広島市がやられた、がんばって再興しようと演説するのですが、その演説の場面が抜けているということです。そして、『重松日記』の後半部分に「原爆死者とその霊（二二三ページ以降）」という章があるのですが、これが「心霊科学」を取り上げたもので、亡くなった人々の霊に会いたい、だから「心霊科学」について考えなければならぬというものですが、この話は『黒い雨』の方では削除されています。今回はこの話は割愛させていただきます。もうひとつの削除されたエピソードについて触れたいと思います。

『重松日記』の中の繊維工場に到着する場面についてですが、ここは『黒い雨』で使われています。しかし、そのあとの、周りの事務所の人たちから市街のことについて尋ねられ、重松静馬が答えるという、『黒い雨』では使われていない場面に注目したい

と思います。重松静馬は雄弁な人物なのです。『重松日記』の四九〜五〇ページにかけての演説を引用します。「皆さん、世界中の人類は火によって生活し、火によって生活し、火によって文化を築いて来ました。広島も、川口に溜まった砂の上に、火によって生活し、火によって文化を営々と築き、文化的な広島市街を作りました。その生活と文化は、今日迄生活して来た火、文化を築く源泉となった火によって、四五時間の中に広島を焼きつくし、其の上に何万人か、何十万人かわからないが、市民の生命も火によって奪われ、地下何百メートルかに葬り去られてしまったのです。／＼広島市の千年の歴史を知っていたであろうと思われまます国泰寺のあの楠の大古木が、根抜きとなり、倒されていますことを考えて見なさい。如何に猛烈な空襲であつたか、分るでしょう。生き残った、いや、死を免れた広島市民は、明日から生活の新しいスタートをする外はありません。焼け跡に広島は又立ち上がるでしょう。皆さんもどうか元氣を出して、国の為に、会社の為に、立ち上がって下さい。」この演説は『黒い雨』新潮文庫版の一五七〜八ページあたりにあつてもよいのですが、実際にはカットされています。何を捨選択するかは井伏の自由なのですが、これには何か意味があるのではないのでしょうか。『重松日記』の重松静馬は力強く演説をするのですが、『黒い雨』の閑間重松は呆然としているという書き方になっているのではないのでしょうか。

このことを念頭において、『重松日記』の五四ページから五七ページ、「土気昇揚」という章を取り上げます。ここでも重松静馬は演説をしますが、その内容は興味深いものです。「工員が整

然と並んでゐる。直ちに登壇して、彼等の第一に求めている広島市内の今日の状況を、僕の行動を追つて行く様な順序で、細大洩らさず話してゆき、最後に、カトリック教会の神父さんの救援活動の崇高な姿と、路傍の民家の在り方を、彼等の心に訴え、続いて、第一次欧州大戦の時、英国セントランド湾の北丘に、二歳の病児をつれて留守宅を守つていたローレンソン夫人が、苦しむ坊やの看護のすきに、ふと湾内を見ると、月のうす明かりに、一隻の船が這入つて来て、だんく沈んでゆく」というローレンソン夫人のエピソードが書かれています。『重松日記』の五四〜五五ページです。このエピソードの典拠は調べてもよくわかりませんが、話自体は以下のようなものです。ローレンソン夫人はイギリスのある湾の近くの田舎町に住んでゐるのですが、どうもドイツの潜水艦が来ているらしく、我がイギリス軍の艦隊を撃沈しようとしてゐるということで、自分の病んでゐる子供を打ち捨てて郵便局に行つて、軍に通報するのですが、夫人が帰つてみると、子供は息を引き取つていたというエピソードです。ある種の愛国夫人物語です。もうひとつ、愛国というよりはむしろ勇敢な女性の物語への言及があります。これはストア夫人作の「アンクル・トムズ・ケビン」とありますが、つまり Harriet Elizabeth Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin* です。それは、「アンクル・トムズ・ケビン」に出て来るエルザが、愛児を抱き、追跡して来る人と猛犬を逃れ、アレガニーの山脈からなだれ落ちて流れている水塊の上を、次から次へと飛び渡り、あの大河ミシシッピーを渡り大概のオハイオ州にたどりついた愛の一念を語」るものです（五六ページ）。補足しますと、エルザは奴隷の女性です。彼女は同じ奴隷

自分のジョージという人と子供を持つことができたのですが、主人によつて売り飛ばされる状況に陥り、そこから逃げようとして、水塊が流れてくる川を、氷の塊の上に乗つて飛んで渡つて逃げるという非常に危険なことを冒して、奇跡的に逃げたというエピソードです。そのエピソードを語つて、『重松日記』の重松静馬はこう言います。「今我等は如何になすべきか、それは諸君の胸にあることで、出征兵士に服の着換えをあたえるのも、着のみ着のままにするのも、裸にするのも、諸君の心にあるのだと云う意味のことを話して壇を降りた」（五六ページ）。実際、いったん重松静馬は壇を降りるのですが、工員たちが盛り上がったためもう一度登壇します。「皆さん有難う、此の信念、此の勇氣こそ、工場に勤めるものの最大の奉公です。弱きものよ、汝の名は女なり、と云う西洋の諺があります。女は弱い者でしょうか。決してそうではありません。一旦愛の力の働く時には、偉大なる力を發揮いたします。あのローレンソンやエルザの偉大なる力は諸君にもあり、それが動くか動かざるかにある丈です。今の意気が一団となり、それに偉大なる男子の力が加わり、結束した此の力でどんな事でも出来ます。明日から此の意気で働いて下さい。皆さんの立ち上がつて下さつたことに対し、衷心より御礼を申し上げます」と云つて壇を降りた。涙が出そうだ、うれし涙が（五六〜五七ページ）。これらのエピソードは『黒い雨』の方では完全に削除されています。実際、『黒い雨』では、この演説エピソードは使用されず、「八月七日 僧侶代行」というエピソードにつながつています。これらのことをふまえて、問題提起として、こういうことを考えてみました。繊維工場の工員の前で、士気昇揚をするために演

説をする重松静馬には特段不思議なところはありません。そのよ
うな人だったのでしよう。ただし、演説の際に、わざわざ敵対し
ているところのイギリスの愛国夫人の話と、アメリカの「アンク
ル・トムズ・ケビン」の逃亡女性の話をして、果たして工員たち
の意気を盛り上げることができるのかという疑問が湧き起こりま
す。とはいえ、実際には重松静馬は、工員たちは盛り上がったと
書いておりますので、これは推測になります。重松静馬の演説
のメッセージとは、アメリカやイギリスの女性ですらこれだけ頑
張っているのだから、日本人である諸君はもつと頑張れというも
のだったのではないか、とは言えるでしょう。もう一点、そもそ
もどうして重松静馬はこういう英米のエピソードをすらすら言え

るのか、ということ。彼の知識というのが、一体どこからき
ているのか、ということも気になります。ともあれ、重松静馬が、
英米の文化文学に詳しく、演説が好きであったということになる
と、ハーシーがアメリカとつながりの深い谷本清を取り上げたよ
うに、重松静馬を取り上げてもよかつたのではないかと想像した
りもします。このエピソードが『黒い雨』に生かされなかつたの
はなぜなのか、今は明確な結論はありませんが、『黒い雨』の主
人公が雄弁な英米通であつたとすれば、はたしてこの作品は「古
典」になつたのだろうかと思えるのは興味深いことではないでし
ょうか。以上です。ありがとうございました。